

源氏物語と舞台である京都とは、切っても切れない関係にある。そこでこの稿においては、車を使って源氏物語の旅をすることにしよう。が、詳しく書き出すとキリがないので、要点のみをかいつまんで述べていくことにする。市内・京内については歩いてまわれよう。より詳しくは、以下の三冊を主にみられたい。

・『京都源氏物語地図』（社団法人紫式部顕彰会編纂。思文閣出版。二〇〇七）…廉価。

・『源氏物語の地理』（思文閣出版。角田文衛・加納重文編。一九九九）…本格的な書。

・『源氏物語を歩く』（京都新聞社編。杉田博明著。光風社出版。一九八六）…一般向き。

なお、傍線を付した語は、源氏物語に関連する建物、施設、社寺、仏閣などを示す。

では、地図を片手に、まず始発は、大原野神社から。有名な古今八七一「大原や小塩の山もけふこそは神世のことも思ひいづらめ」（雑上「二条後の…大原野に詣で給ひける日、よめる」在原業平）は、いうまでもなく奈良の春日大社（藤原氏の氏神、寺は興福寺）を分祠した大原野神社を歌った歌であり、伊勢物語第七十六段でもおなじみである。源氏物語では、「雪ふかき小塩の山にたつ雉のふるき跡をも今日は尋ねよ」、「小塩山みゆきつもれる松原にけふばかりなる跡やならむ」の歌がみられる。源氏物語では、「行幸」の巻に、冷泉天皇の行幸が描写され、玉鬘が尚侍出仕を勧められ

## 車で巡る 源氏物語、京の旅(1)

前 兵庫県立川西北陵高等学校  
小田剛

るとある。

次は北へ上って、明石君山荘である。ここは、後の亀山殿の地と思われ、(徒然草、『新日本古典文学大系』、第五十一段、第二〇七段)にも、「亀山殿の池に大井河の水をまかせられむとて、」(同一二八頁)、「亀山殿建てられんとて地を引かれけるに、大なるくちなは」(同一二七八頁)と出てくる。今の天龍寺あたりと想定される。大井(堰)・桂川沿いの久世、松尾(対岸の梅津——百人一首七十一「夕されば門田の稲葉おとづれて…」・源経信の、出典の金葉・秋・一八三の詞書「師賢朝臣の梅津に人々まかりて…」——)、桂(桂離宮がある)でもなく、おそらくここであろう。明石君は、曾祖父・中務宮の大堰の山荘を修理して、姫君や尼君と共

に上洛し、そこで光源氏の訪れを待ち(松風)、明石の姫君が後に紫上の手許に引き取られる(薄雲)のである。そして次は同じ、嵐山・嵯峨野の野宮を訪れよう。伊勢斎宮に卜定された斎王が、群行に先立って、潔斎のため一年間籠もる仮宮のことである。娘の斎宮と共に伊勢に下る六条御息所を、光源氏がこの嵯峨野に訪れる場面は、古来名文とされている(葵、賢木)。その北に光源氏嵯峨院があり、現在の清涼寺(嵯峨釈迦堂)に比定されている(松風、若菜上)。さらに西山なる御寺は、仁和寺とされており、先の徒然草にも頻出する寺である。その近くに、源氏物語の桐壺帝北山陵があり、今の童安寺の裏の北方の山付近である。そうしてそこから東へ行くと、大徳寺であり、そこには紫式部供養塔や紫式部産湯の井戸が存在する。さらに千本閻魔堂(引接寺)には、南北朝時代の供養塔があり、紫式部の成仏を願った建立とされている。その南方に七野社があり、ここが紫野斎院である。賀茂の斎院、伊勢の斎宮と並称され(賢木)、かの新古今随一の関秀歌人である式子内親王(生まれは三条高倉・京都文化博物館の地)が、若き十代の十年を過ごした地でも知られる。「郭公その神山の旅枕ほのかたらひし空ぞ忘れぬ」(新古今一四八六・雑上「いつきの昔を思ひ出でて」)は、そのゆかりの詠である。そのま北に雲林院があり(賢木)、百人一首の本にも、今の寺の写真が、素

性法師（雲林院に住んだ）の歌二十一「いまこむといひしばかりに長月の…」(なお、この歌については、長夜説、一夜説がある。)と共に記載されるが、昔はそんな小祠ではなく、もっと広大な地であつたのだ。また大鏡の冒頭の、ここ雲林院での菩提講も忘れがたい。そしてこの近く堀川北大路下ル、西側の地に、紫式部の墓あのみなむらが小野篁の墓と並んである。これが紫式部の墓であるというのは、荒唐無稽な説ではなく、ほぼ確かだと考証されている。

さらに北へ行こう。ここは上賀茂神社で、先の式子内親王ゆかりの地であり、かの葵上と六条御息所の車争いの場面は名高い、(葵、藤裏葉)。ここより岩倉へ行けば、北山ながし寺のモデルとして有力視されている大雲寺がある。現在、大雲寺説が有力であるが、鞍馬寺、志賀寺、北山靈巖寺、仁和寺、北山殿辺の神明寺など異説も多い(若紫)。次に浮舟小野山荘へ行こう。八瀬(中心部)と大原との中間辺りとされている(手習)。その東北東が横川の地であり、源信がモデルとされる横川僧都がすぐ思い浮かぶが、ここから車では行きにくい地なので省略する。が、宇治十帖には欠かせない舞台である(手習、夢浮橋)。下つて修学院(離宮)の辺りが、夕霧小野山荘である(夕霧)。伊勢物語、古今集の惟喬親王を業平が訪れる小野も、この辺とされている。「小野にまうでたるに、比叡の山の麓なれば、雪いと高し。」(伊

勢物語、『新日本古典文学大系』、第八十三段、

一六一頁)。さらに南西に下ると、そこは下鴨神社である。ここは「賀茂の下の御社」(須磨)、『新日本古典文学大系』、十八頁)として出て来ており、南の杜である糺たぎの森も、「うき世をばいまぞ別るゝとまらむ名をばたゞすの神」「糺の森の神」にまかせて」として記されている。なおここには鴨長明ゆかりの河合社もある。ここより南へ下れば、紫式部邸宅跡の廬山寺らざんであり、その南の四町(約200メートル四方)が法成寺ほうちゆうじであり、かつての広大な寺域も、他の遺跡同様、面影はなく、今は一基の碑が立つのみである。荒廢のさまは、徒然草(第二十五段)にも出てくる。その法成寺の南西一町(約100メートル四方)が、紀伊守中川家であり、光源氏が伊予介後妻の空蟬うつせみと邂逅した邸宅であった(帚木)。空蟬に紫式部を見る研究者もいる。その邸の西である、今の寺町通には、昔中川が流れていたのであつた。

そして今の京都人の感覚からすれば、市街・市内は、北大路、西大路、東大路、八条ぐらいまでがはしなのであり、中心は烏丸、四条通といった感じなのであるが、平安京としては、いうまでもなく、朱雀大路(今の千本通)がメインストリート、そして一条、西京極、東京極、九条が四周の計画であつたのだ。その東京極(今の寺町通)のさらに外の河原町通が、今の京都ではもともと地価の高い所(四条河原町)

であるのも、千年の時の流れといえようか。

ここより洛中・市内へ入ることにする。法成寺の西・タテ二町が、あの道長の邸宅の、土御門殿であり、一条帝中宮彰子の里邸として、「秋のけはひ入りたつま、に、土御門殿の有さま、いはむ方なくをかし。」(『新日本古典文学大系』、二五三頁)と、紫式部日記の冒頭にも描かれているのは、よく知られている。その北が清和院・染殿ぞめいであり、「染殿后」「藤原明子」の御前に、花瓶に、桜の花を…」の詞書を持つ古今五十二「年ふればよはひは老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし」(春上、前太政大臣・明子の父・良房)の詠は、あまりにも著名である。その南西に鷹司殿(道長の妻・源倫子)があり、その北北西一町に、道長が早く住んだ藤原道長一条邸がある。またその西一町が落葉宮一条邸である。朱雀院皇女落葉宮の本邸で、柏木の死後、その友人夕霧は未亡人落葉宮を見舞う。が、夕霧は雲井雁がいながら、恋心を抱くようになり(柏木)、柏木遺愛の横笛を贈られるのである(横笛)。

(続く)